

【人非人どもの饗宴】

紫楼 巧

晴れわたった空は青と言うよりも藍色だ。

そんな深い色を強調するように、一つだけぽつりと浮かんだ白い雲から覗く太陽を仰ぎ見て、佐藤美咲は眩しさに目を瞬いた。

錨を下ろしたばかりのダイビング用の小舟から視線を海面に戻すと、ほとんどベタ風ぎに近い海は、十メートル以上も下の脳珊瑚と海底を透かし見せている。

風が、凧いだ海と藍色の空とのあいだを渡っていく。亜熱帯に属する沖縄の、酷暑にはまだ少し間があるこの時期特有の澄んだ海風が、彼女のウェットスーツの肩にかかる長い髪をなびかせた。

また今年もやってきたんだ。

短大を卒業後OLになって五年。三年めから毎年休暇を取って訪れているこの沖縄県乙諸島の海を眺めていると、会社務めで溜った澱が拭い去られていくような開放感で心が洗われる気分になれる。

「あら、あの船って……。確かさつきも見かけなかった？」

そう言ったのは、美咲の隣で同じく海を眺めていた倉守玲子だった。

玲子の不安げな口調を訝しげに思いながらも視線を追うと、島影から一隻の船がエンジンの音を響かせて現れたところだった。距離は、そう二百メートルばかり先か。遠目にも、美咲と玲子が乗っている四級船舶免許で操縦できるボートではなく、地元の漁師が使うような小型の漁船なのが分かる。

「それがどうかしたの？ 漁師さんでしょう」

「え、ええ……そうなんでしょうけど……」

確かに、こんな時間に漁師が船を出す事は珍しい。だけど、それがそんなに心配するような事なのだろうか。

やっぱり、少し変わった人だわ……。

美咲は、ショートカットに切り揃えた髪から覗いている玲子の曇った横顔を見つめる。

彼女とは、昨日、泊っている民宿で知り合ったばかりの仲だった。

まだ夏休みでもないこんな時期に、有名な観光地とは言えない乙諸島に一人旅だもんね、やっぱり何か事情のある人なのかも知れない……。

「あの、玲子さん……」

かけた声に玲子が振り返る。不安げな表情は既に消え、美咲よりも少し年上に見える顔には笑

顔が浮かんでいた。

「あつ、ごめんなさいね。じゃあ、始めましょうか」

そのまま、傍らに置いてあるエアポンベをセットしたスタビライザーを取り、海に放り込む。救命胴衣に似たその器材は、中に詰まった空気によって浮かぶので、飛び込んだ後、背負うようにして体に装着するのだ。

玲子にならって美咲も自分の器材を海に投げ入れ、船べりからエントリーする。途端に、冷たく心地好い海水の感触がウェットスーツに染み込んできた。

Z諸島の海底は白色だ。有孔虫の抜け殻や珊瑚、貝殻の漂白されたカケラが、所々に大きな岩場が突き出した海の底を覆っているのだ。

スタビライザーの空気量を微調節すると、背負ったポンベの重さが浮力によって相殺され、文字通り無重力の感覚が生まれる。

軽く蹴ったフィンによって、海底から巻き上がってきた白い微粉が、まるで粉雪を真似るかのようには舞う中を、原色の熱帯魚が泳ぎまわり、海面から射し込んでくる幾すじもの太陽光が、美咲のコバルト色のウェットスーツにキラキラと輝く光のパッチワークを描き出す。

ほぼ一年ぶりの海中の別世界に、美咲はゆったりと漂い、レギュレターの排出口から次第に膨張しながら昇っていく呼気の泡を見つめていた。

カン！

と、突然、甲高い金属音が響いた。

振り向くと、数メートル先にいる玲子がダイビングナイフでエアポンベを叩いた時の音だった。地上よりも音が通りやすい海中でダイバーがよく使う合図だ。

続けて、手振りで呼びかけてくる。どうやら場所を移動して、もっと深く潜ろうと言っているらしい。

美咲は少し不満だった。このZ諸島の海で最も美しい光景が見られるのは、今、彼女たちがいる水深十メートルの辺りなのだ。それに、深く潜ると潜水時間も短縮されてしまう。

その場でためらっていると、玲子が近寄ってきた。美咲の腕を掴んで、しきりに移動を誘う。なんだか慌ててるみたい……。

彼女の態度を不思議に感じながら、それでも美咲は促されままに泳ぎ出そうとする。

その時、また音が聞こえてきた。今度は船のスクリー音で、轟くような響きが次第に大きくなっていく。

この近くにいる船って言ったら、さっきの漁船で……。

いえ、違うわ。もう一隻いる。

水中を伝わってくる音には、別の船のスクリー音が混ざっていた。それはもっと軽快な音で、

多分、高速のモーターボートだろう。

潜水中のダイバーにとつて、近寄ってくる船は安全とは言えない。航行によって発生する波もそうだし、それこそスクリューに巻き込まれでもすれば大ケガは必至だ。

じゃあ、玲子さん、それで……。

既に至近に迫っている二隻の船から逃げようと、フィンで大きく水を蹴った時、三つめの音が海面から聞こえてきた。

それは彼女が初めて耳にする音だった。

まるで車のバックファイアの音。破裂するような鋭い音が小刻みなスタツカートを刻む。

そして、水音。近寄ってきたモーターボートから何か大きなものが落ちた時の激しい水音――

肩越しに振り返った美咲が見たものは、沈んでくる若い男の姿だった。身に着けたTシャツの胸から、まるで赤黒い煙のように見える大量の血を噴き出し、驚愕に見開かれたままの目は既に生気を失っている。

な、なに？ これって、なにっ？

到底現実とは思えない光景に、美咲はその場に釘づけになる。

再び水音。

今度落ちてきたものは、野暮ったい作業着のような服を着た中年男だった。首が喉仏の辺りから真後ろに向かって水中銃の銚で射貫かれており、日本人ではないアジア系の顔は激痛に歪んでいる。

ほんの先程までパラダイスさながらに美しかった海を血に染めて、断末魔に暴れまわる男と、更に激しさを増していく海上の喧騒――

パニックがやってきた。

呼吸が昂進する。理性が失せる。人間の中に潜む一匹の猿が目醒ます。

危険だ、ここは危険だ！ 水の中は危険だ！

美咲は、更に危険な海面に向かって上昇する。

水圧を受けて圧縮されていた肺の中の空気が海面に近づくにつれて膨張し、胸の奥に異様な感触を伴った鈍痛が生じる。それが更に恐慌を助長し、彼女は激しく水を蹴る。

と、脚に何かが絡まった、いや、フィンを何かが掴んだ。

玲子だった。

彼女が美咲を水中に留めようと体を押さえ付けてくる。しかし、パニックに囚われている美咲は暴れ回り、その腕を必死で振り解こうとする。

美咲の水中マスクに玲子の手がぶつかった。

ずれたマスクの際から、どっと流れ込んできた冷たい海水の感触と、いきなり奪われた鮮明な

視野。更に深まった狂乱の中で、美咲は唾えていたレギュレターを吐き出す。

塩辛いと言うよりも苦い海水が気管に流れ込み、窒息の苦しみが襲いかかってきた。

恐怖が限界を超え、意識がふっと途切れた。

美咲が最初に感じたものは、胸の奥のヒリつくような痛みだった。途端に、激しい咳が喉を震わせ、海水のえぐ味が口の中に広がる。

涙が滲む目を開くと、どうやら自分は今、地元の漁師が資材置き場に使っている小屋の中にいるらしい。周りには古ぼけた漁具が置かれ、外からは打ち寄せる波の音が聞こえてくる。

部屋の中は薄暗かった。ヒビ割れたガラス窓からぼんやりと射し込んでいる日光は既に夕方遅くのもので、埃の積もった木造の床に直接置かれた灯油ランプが黄色い光を放っている。

湿ったウェットスーツを着けたままの体を動かそうとした時、縛られている事に気づいた。

両腕は背中に回されており、床に座った恰好で投げ出された両脚は、黒く変色した縄で足首を固く拘束されている。

恐怖に駆られて辺りを見回すと、近くの床に、美咲と同じ恰好にされた玲子が倒れていた。気絶しているらしく目は閉じられており、しかも、唇や頬、胸の辺りまで開いたウェットスーツの下の肌には、赤黒い痣が浮いていた。

これって、これってなに？ いったい、どうしたって言うの？

「やっとお目覚めかい」

顔を上げると、二人の男が隣の部屋から現れたところだった。両方とも美咲と変らないぐらいの歳で、色あせたジーンズとTシャツを身に着けている。

「あ、貴方たち誰、誰なの？ それに、どうして——」

「へえ……」

話しかけてきた方の男が、持っていた水中銃を傍らの床に置き、美咲の前に膝をついた。

「俺たちの事を知らないってわけだ。ハハッ、それで誤魔化せるとでも思ってたのかよ？」

「誤魔化すって、だ、だって、本当に……」

「まったく、甘く見られたモンだぜっ！」

男の浮かべていた薄笑いが凍りつき、平手が頬に飛んできた。鋭い痛みと共に口の中に血の味が広がり、そのまま髪を掴まれて顔を引き起こされる。

「邪魔しやがって。健二まで撃ち殺されちまったってのに、全部ぶち壊しじゃねえか、いいか！ お前とあの仲間の女は絶対許さないからな」

男が美咲のたつぷりとした乳房を鷲掴み、手に余る肉をこねまわしながら、もう片方の手でウェットスーツのファスナーを引き下ろしていく。

下に着けた赤いビキニに飾られた体が現れるにつれ、目に浮かんでいた狂暴な光の中に、更に

危険な欲望が浮き上がってくる。

「いい体してんじゃねえか。こりゃいいや。殺す前にじっくり楽しませてもらうぜ」

「こ、殺す？ 私を、私をこ、殺すの？」

「ああ、その通りだ。但し、楽には死なさないぜ、じっくり時間をかけて馴り殺した。泣き叫ばせてやるぜ、自分のやった事を後悔させてやるぜ」

「そ、そんな！ いったい私が何を――」

男がビキニのブラを剥ぎ取った。

弾け出た二つの豊満な膨らみは、恐怖の息遣いにブルブルと震え、白くシミ一つない隆起の頂点では、薄い色の乳首が小指の先程にそそけ立っている。

乳房を掴んだ男の手が、ゆつくりと、しかし容赦なく力を加えてくる。

美咲の漏らす苦しげなうめきを聞き、男がニヤリと顔を歪めた。

「どっちがいい？ 先に乳首を切り取ってやろうか？ それとも、この綺麗なオツパイを切り刻んでからにしてほしいか？」

男がジーンズのポケットから取り出した物は、美咲自身のダイビングナイフだった。

「い、イヤッ！ そんなの嫌、やめて、お願い許して！」

「やめなさい！」

突然聞こえたその声にハッと振り向くと、床の玲子が気絶から醒め、痣の浮いた目を男に向けていた。

「聞こえないの、このヘンタイ！ その人から離れなさい、離れるのよ！」

「へえ、流石だな。あれだけ痛めつけてやったつてのに、元気がいいじゃねえか」

美咲の乳房にナイフを押しつけたまま、男が、背後のもう一人の男に振り返る。

「おい、俊一、そいつが相手してほしいつてよ」

「へへへつ、待ってました。俺もそろそろ堪らなくなってきた頃なんだ」

俊一と呼ばれた男が、玲子にせせら笑いを向ける。

「おい、アンタ、確か玲子とか言ったよな、じゃあこの浩司のお相手の女は何てんだ？」

「……………」

玲子が無言で俊一を睨みつける。

「へへへつ、いいよなあ。気の強い女つてのは好きだよ」

俊一が玲子に近づき、いきなり鳩尾の辺りを蹴り上げた。それはまったく手加減のない一撃で、玲子はくぐもった呻きを吐きながら床の上でのた打ち回る。

「ハハハッ！ 苦しいか、痛いかな。ほら、もう一発だ、ほらほら、もつとだ、もつとその悲鳴、

聞かせてくれよ！」

薄暗い廃屋の中に、俊一の上げる甲高い笑い声と玲子の悲鳴、容赦なく繰り出されるスニーカ

ーが、きゃしゃな女体を打ち、骨を軋ませる重く鈍い音が響く。

聞こえてくる気が狂いそうになる音から耳を塞ぐ事もできず、美咲は必死に体をよじって髪を振り乱す。

「美咲よ！ 私、佐藤美咲って言うの、お願い、もう玲子さんを許してあげて！」

叫んだ美咲に俊一が振り返った。目が、抵抗できない女に振るう暴力の愉悦に憑かれたような光を帯びている。

「そうかい、あんた美咲って言うのか。美咲と玲子か、二人ともいい名前じゃないか、殺した後もずっと憶えといてやるよ」

再び、床の玲子に視線を向ける。

「ほら、起きな！ もっと痛めつけてほしいのか」

玲子が苦痛のうめきを漏らして床に横座りになると、俊一が彼女のウェットスーツと下の水着を剥ぎ取った。あらわになった玲子の体は、赤紫色の内出血や、薄く血を滲ませるみみず腫れに被われていた。

「堪えないなあ。お前みたいなスレンダーな女の傷だらけの体、思いつきりカンじるぜ」

俊一がジーンズのアスナーを下ろし、弾け出てきた淫茎を玲子の顔に突き付ける。

「ほら、舐めな、自分を殺す男に舌でサービスしな。そうだなあ、巧くできたら、少しぐらいは手加減してやってもいいんだぜ」

玲子が唇を開く。目の青筋を浮かして突き立っているモノを啜えようとした時、俊一が腰を引いた。

「おっと、誰が啜えろって言った。噛まれてもしたら大変だからな、舌を出して舐めるんだよ」

玲子が一瞬悔しげに視線を逸らせるが、伸ばした舌を淫茎に這わせ始める。

「そうだ。綺麗にするんだ。全部舐め取って飲み込むんだ」

玲子の舌が動くたびに赤黒い肉塊はヒクンヒクンと跳ね、その先端の小穴から透明な粘液を滲ませる。

俊一が自分の淫茎を掴んで、前後に擦り始めた。

「ああ、いいぜ、最高だっ！」

昂ぶりの叫びを上げて、俊一が、屈辱の奉仕を続ける玲子の頬に平手を飛ばす。鋭い音を発して弾けた顔を無理矢理に引き戻し、更に打ち続ける。

「ほらっ！ 舐めな、舐めるんだよ！」

玲子の頬を撲る度に、舌が淫茎を這う度に、俊一は喉の奥から掠れた呻きを漏らし、狂暴な劣情と快楽に腰をガクガクと震わせている。

「クッ……！」

淫茎が一際膨れ上がった瞬間、玲子の顔を股間から引き離れた。

「ヤバイヤバイ、危なくイツちまうところだったよ。まだまだ楽しませてもらわなきゃな」
その場に座り込み、全裸の玲子を広げた膝に抱え上げる。腋を通した両手で、紫色の痣と薄い血に彩られている小振りな乳房を驚つかみ、手荒くこね回しながら乳首を捻り潰す。

「くっ……あぁっ、い、痛いっ……あううっ……！ 許して、お願い、もう許して……」
哀願の声を聞き、ニヤツと唇を歪めると、俊一は玲子の足首を縛っている縄を解いて、その黒ずんだ兇器を彼女の首に巻き付けた。

「股を広げなよ。逆らったらどうなるか分かってるよな」

縄の両端を軽く引かれ、玲子が慌てて脚を開く。俊一の膝の上で長くスラリとした太股が分かれ、奥の秘部がさらけ出された。

黒々とした恥毛に飾られた大陰唇は、玲子の体型そのままに肉付きも薄く、内腿に引かれて口を開いている合わせ目の奥には桜色の粘膜が覗いている。

「いいオマ○コしてるなあ。上付きだから、全部丸見えになってるよ」

俊一が柔肉を左右にめぐり上げて内側を弄り始める。その手付きは到底愛撫と言えるものではなく、女の敏感な肉をいたぶり、苛む動きた。

包皮を引き上げ、剥き出しにしたクリトリスに爪を立てる。

「ヒイツ！」

「いい声だ。あぁっ……まつたくいい声だ」

二本揃えた指が、膣口を軋ませながら奥に潜りこむ。

「えっ……い、イヤッ！ あぁぁっ……！」

突然、玲子が体を仰け反らせ、悲鳴を振り絞った。広げた太股が苦痛に振れ、嬲られる秘部は内側から盛り上がっている。

「へへへッ、どうだった？ オマ○コの中を引っ搔かれた気分は」

柔らかな秘肉を押し広げてズルリと抜け出してきた二本の指は、薄い粘液混じりの鮮血に赤く染まっていた。

「さあて、たっぷり濡らしてやったし、自分で入れてもらおうかな、俺のこれをな」

腰を突き上げ、淫茎を下側から玲子の秘部に押しつける。

「ほら、早くしてくれよ。血まみれのオマ○コの味、楽しませてくれよ、さもないと——」

俊一がゆつくりと縄を引き、玲子の首を絞め始めた。

イヤ、もうイヤ！ 狂ってる、この男たち、本当に狂ってる！

傷ついた秘部に自ら俊一のモノを受け入れていく玲子の姿を見た時、美咲は遂に耐え切れずに顔を背けた。

「目を逸らすんじゃない！」

浩司が、後ろから掴んだ美咲の頭を引き起こす。

「ほら見てみな、お仲間があんなに尻振って悦んでるぜ、傷だらけのアソコでヤルのが堪らねえつてよ」

「イヤッ！ 絶対イヤッ！」

グチャグチャと濡れた肉どうしが擦れ合う音と、玲子の漏らす苦悶の呻き、そこに重なる俊一の喜びの喘ぎ声――

「へへへッ、首を絞めるとオマ○コも絞まるってのは本当だったんだな。イイぞ、中がヒクヒクして凄くイイぞ！」

美咲は、全てを拒絶するかのように固く目を閉じる。

と、左の胸に鋭い痛みが走った。驚いて見ると、乳首の下に浅く食い込んだナイフの切っ先が血の粒を浮かしている。

「ヒイッ！」

「暴れるんじゃねえ、下手に動くぞズブツといっちゃまうぜ」

浩司が後ろから美咲を押さえ付ける。

「遠慮すんなよ、綺麗に化粧してやろうってんだ」

淡い色の乳輪に沿って、銀色に光る鋭い刃が動き始める。

文字通り体を切り裂かれる苦痛と恐怖――身を凍らせて見つめるなか、小さな乳首を丸く囲む傷口から流れ落ちた血が、白い乳房を朱で彩り、薄く脂肪の乗った腹を滑り落ちて、太股の狭間の黒い恥毛を濡らす。

「次はもつと深くだ。ゆっくりゆっくり傷を深くして、乳首をえぐり取ってやる」

「い、イヤッ！ お、お願い！ お願いです、許して、何でもします、何でも言う事ききますから、お願い許して！」

「ほう、何でもか、そりゃ楽しみだ。あの玲子みたいに俺を悦ばせてくれるって訳だ。ほら見な、俊一の奴もうイッちまうぜ」

縄を引く俊一の手がこもる。

「くううっ！ 絞まる、ううっ！ 最高だ、最高だっ！」

狂気の快楽に叫ぶ俊一の上で、玲子が必死に腰を振り、尻をくねらせる。

「アハハッ！ 美咲、見てみなよ、玲子が凄げえ腰使いしてるぜ、だが間に合うかな。俊一がイッちまうのが早いか、玲子が逝っちゃうのが早いか、なあ、どっちだと思っ？」

玲子の全身に気味悪げな痙攣が走り、涎を垂らし半開きになった唇の奥からヒュッヒュッと短く途切れた喘ぎが漏れ始める。

「くっ！ うぐうっ！ チクシヨウ！」

縄を引く俊一の両腕に腱が浮き、同時に腰を突き上げる。野太いうめきが上がり、血に濡れた

淫茎がドクンと弾けた。

長々と続く射精の快樂に浸る俊一の腕から力が抜け、縄が緩む。力を失った玲子の体が、目前の床に崩れ落ちた。

死んじやった、玲子さん、殺されちゃった。酷い、こんなの酷い、酷すぎる！

喉の奥から絶叫が迸ろうとした瞬間、床に突っ伏した玲子の体がひくりと動いた。続いて激しく咳き込み、涙に濡れた目が開く。

「あれれ、アンタまだ生きてたのか。へへへッ、可哀想になあ、今死ねてたら随分と楽だったのに」

見下ろす俊一が、楽しげな笑みを浮かべて立ち上がった。

「ほら、起ろよ。次のお仕置きだ、ここじゃちよつと狭いから、外で遊ぼうか」

まだ息も整わず抗う事もできない玲子を、俊一が半ば引きずるようにして小屋から連れ出していく。

「待って！ 何をしようって言うの、それ以上、玲子さんに何を！」

「ギヤアギヤ喚くんじゃねえよ。どうせ無粋な俊一のこった、殴る蹴るの好き放題やって、興奮してきたら今度こそ本当にヤリながら殺しちゃうつもりなんだろう」

「そ、そんな……。どうして、どうしてこんな酷い事するの、私たちがただダイビングしてただけなのに、勝手にやってきて……。お願い、誰にも言わないから、絶対に言わないから……」

「ほう、お前……」

すすり泣く美咲を見つめる浩司の顔に、ふと驚きの表情が過った。だが、それはすぐに元の薄笑いの中に消えてしまう。

「……まあ、どっちでも結局同じこった。それよりも、さっき何でもするって言ったよな、何をしてくれるんだ？」

「それは……」

美咲がうつむき、ようやく血の止まった自分の乳房を見る。

「分かったわ。縄を解いて、縛られたままじゃ何もできないでしょう」

「駄目だ。手が使えなくても口があるぜ、ほら、さっさとやってみせな！」

その時、小屋の外から玲子の悲鳴が聞こえてきた。そして、それに続く、固い物が柔らかな物を打ち据えている時の音と、俊一の哄笑――

「ほら、始まったぜ。いいBGMじゃねえか」

浩司が美咲を突き飛ばし、床に這わせる。見上げる彼女の目の前で股を広げた。

美咲が全裸の体を起して、浩司の太股のあいだに顔を埋めていく。唇を使ってジーンズの股間をまさぐり、歯で挟んだ留め金を引き下ろす。開いたファスナーから膨れ上がった下着は粘液を吸って湿っており、漂う男の臭気が鼻を突いた。

「どうした、早くしないか」

浩司が美咲の頭を引き寄せ、ナイフを耳に押し当てた。

「但し、歯を立てたりしてみやがれ、これを切り落としてやるからな」

自分の血に汚れたナイフの冷たさ。美咲は総毛立つ思いの中で顔を伏せ、下着の中から弾け出した淫茎を啜えた。

「うううっ……」

昂ぶりに濡れた男の肉の逞しい感触は、状況が違えば、美咲の心の奥に別の感情を生じさせたかも知れない。だが、今の彼女は浩司の狂暴な欲情を少しでも冷まそうと必死だった。

龟头をくまなく舐めしゃぶり、男の急所である先端の小穴を舌先でくすぐる。更に膨れ上がった肉竿を閉じた唇で圧迫し、そのままゆっくりと顔を上下に振る。

「なかなかのモンじゃねえか。けどな、深さが足りないな、俺は深く啜えられるのが好きなんだよ」

いきなり頭を掴まれ、押し下げられた。

「あぐっ！ ごほっ！」

喉の奥に食い込んできた淫茎によって呼吸が止められ、激しい喘ぎが突き上がってくる。

「そうだ、これがいいんだ。震える喉がイイぜ！ おっと、噛むんじゃねえぞ、分かってんだろうな」

浩司が苦しさにのた打つ美咲の髪を鷲づかみ、無理矢理に顔を揺すり立てる。

「うぐうっ！ ゆ、あがっ！ ゆるし……ゴボツ、うげっ、ゆ、る……して……お願い、許して……！」

痙攣する喉に突っ込まれてくる肉塊の苦しさに、美咲は涙を零して掠れた声で哀願を繰り返す。

「アハハッ！ 何だよ、もうサービスは終わるか。じゃあほら、起きて尻を向けな。お前のアソコ見せてみな」

再び髪を引かれ、喉から抜け出してきた淫茎は、濃い涎の糸を引いていた。

美咲が床に這い、浩司にピップを向けた恰好で四つん這いになる。

「たっぷり肉が付いて、いい形の尻じゃねえか」

尻房を両手で掴まれた。そのまま大きく広げられ、全てを剥き出しにされた狭間の奥に視線が食い入ってくるのが分かる。

指が秘部をなぞり、自分でさえロクに見た事もない部分に潜り込んでくる。小陰唇がめくられ、奥の更に敏感な粘膜を撫でまわす。剥かれたクリトリスを摘ままれ、臍に指が押し込まれてきた。

「絞めてみな、どの程度のオマ○コしてるか確かめてやるぜ」

「うううっ……」

美咲が腰をくねらせて股間に力を込める。

惨めだった、恥ずかしかった、だがそれ以上に恐ろしかった。犯される事はもうとっくに覚悟できている。だけど、それで済むはずはない。この男は狂ってるんだ、狂人なんだ。

「ひっ！」

突然、秘部に感じた冷たく固い感触に、美咲が驚きの声を上げた。

恐怖に駆られて振り返ると、思った通りナイフだった。浩司が秘部に鋭い切っ先を押しつけている。

「このビラビラした肉とクリトリス、切り取ってやろうか。そうだな、その後、この穴裂いて尻と繋いじまうってのもイイな、昔そう言うのを何かで読んで、やってみたいと思ってたんだ」

「イヤッ！」

反射的に逃げようとした尻を掴まれ、今度は肛門に触れられた。

「いや、まずは、生きてる内にこっちを楽しむか」

鈍痛と共にこじ開けられた肛門に、二本の指が深く侵入してくる。内臓のとは口をグチャクチャと掻き回され、気味が悪く異様な感触が全身に広がっていく。

指がズルリと抜かれた。

次に肛門に押し当てられてきたモノは、指よりも太く固く熱い勃起しきった淫茎だった。

「うぐっ………！」

昂ぶった男の激しい力を込めて一気に入ってくる。

内臓を突き上げられ、体を串刺しにされる重く鈍い圧迫感と引き裂かれた肛門の苦痛の中で、美咲は身悶え、喘ぎ、のた打ちまわる。

「い、いや、ぐっ、いやああ！　ぐっ、うぐっ、あがあ………！」

「ハハハッ！　ひっとしてお前、感じてるのかよ」

「だ……ぐっ、ああっ！　誰が………！」

「そうかい。じゃあこんなのはどうだ？」

浩司が美咲の背中に覆いかぶさるようにして、後ろから両手を首に回してきた。

「俊一は縄なんて使ってたがな、俺は素手の方が好きなんだよ」

締め付けられた気管がひしゃげ、呼吸が止められる。死の恐怖が膨れ上がった。

「グッ……あぐっ、お、お……願いつ………！」

「安心しな、まだ殺さないぜ。今殺しちまつたら、さっき言った事ができないだろう。ほら、あの女みたいにケツ振りな、尻の穴使う方がオマ○コより簡単だろうが」

美咲が必死に腰を揺すり、裂かれた肛門を引き絞ると、快感の呻きを漏らして、浩司が下腹を押しつけてくる。

「やっぱり女の尻をヤル時はこうでなくっちゃな、この食い千切られそうな具合と、腹に当たってる尻肉の感じが格別だぜ」

目が霞む。くびられた気管から懸命に息を吸い込もうと、大きく開いた唇から涎が垂れる。意識がふっと慈悲の気絶の中に落ち込もうとした時、戸の開く音が聞こえた。

「おっと、へへッ、悪い悪い、お楽しみのみ真つ最中だったのか」

浩司が、戻ってきた俊一に顔を上げ、喉に食い込んでいた指がわずかに緩んだ。

「チッ、いい所で邪魔しやがって。あの女はどうしたんだよ？」

「ああ、海に棄てたから今頃は魚の餌だろうな。いやさ、小便飲ましてやろうと思ったら逆らいやがって、ちよっと力入れて蹴りまくってやったら死んじやったよ」

「そうかよ、ハハッ！ まったく手加減知らずのお前らしいぜ」

「なに言ってるんだよ、浩司こそ、まだその女生きてるじゃないか。とつくに刻んじやっていると思ってたよ、そろそろ時間もヤバイんじゃないのかな」

「まだ大丈夫だって。それよりな、さっき面白れえ事を思い付いたんだ。すぐに終わるからちよっと待ってな」

頭の上で交わされる男たちの残酷な会話を、美咲は乱れた呼吸の中で聞いていた。絶望によって頭は半ば痺れてしまったようで、もう、玲子が殺された事を聞いても何も感じる事ができない。

「ほら、何やってんだ、さっきみたいにケツ振るんだよ」

再び首に掛かった浩司の手に力がこもり、美咲は、ただ従順に淫らな尻の奉仕を繰り返した。始めた。

「で、浩司、さっき言ってた、面白い事って何なんだよ？」

「ああ、そうだったな」

浩司が立ち上がると、横倒れになっている美咲の頬の下で床が軋んだ。

裂かれてしまった肛門は、心臓の鼓動と共にズキンズキンと重く痛みながら、血と混じり合った精液を滲ませている。

内臓に射精され、床に放り出された後も、現実感の希薄さは続いていた。それは、あまりに過酷な運命からの逃避だったのかも知れない。

嘘よ、こんなの嘘……ダイビングしてただけなのに、知り合いの人が目の前で強姦されて殺されて、これから私も……。絶対違う、こんな事、本当に起るはずないもの……。

「なにぶつぶつ言ってるんだよ、ほら起きな、休憩は終わりだ」

一旦離れ、戻ってきた浩司に脇腹を蹴られた。

顔を上げると、彼が何か白い物が入った小さなビニール袋を持って見下ろしている。

「浩司、そんなもの持ち出してどうすんだよ？ もうそれだけしか残ってないんだぞ」

「分かってるよ、んなこたあ、女どもに邪魔されて海に流れされちゃったからな。まったく、騷り殺してやるぐらいじゃ合わないぜ」

「ああ、さんざん苦勞してやつと運び屋のルートを探り出して、横取りしてやっと思ったたらこれだもんな」

「おまけに、残ったこいつも海水吸っちゃまったから、多分、ロクな値段じゃサバけやしねえだろう。だからどうだ、こいつ使ってこの女楽しもうぜ」

「フリった女ヤルのかい、どうかなあ、やっぱり女つてのは、脅えきって泣き叫んでるのを無理矢理、つてのがイイんだけどな」

「慌てるなって、そうじゃねえよ」

屈み込んできた浩司の、手に握られたナイフを見た途端、現実感が戻ってきた。

「い、いや！ イヤッ！ しないで、お願い、死にたくない！」

えっ

足首を縛っている縄が切られた。続いて、手首の拘束も解かれる。

「どうしたんだ、逃げないのかよ？」

「に……逃がしてくれるの……？」

呆気にとられて見上げる美咲に、浩司が歪んだ笑いを向ける。

「ああ、逃がしてやるよ。但し、俺たちがこの薬、キめるまでだ。その後は追いかけてこた、捕まったらどうなるか分かってるよな、このナイフ使って、さっきと逆の事言わせてやるぜ、早く殺して下さい、楽にして下さいって、叫ばせてやるぜ」

「……！」

「ほら、逃げたくないのかよ。いいんだぜ、今から始めてもな！」

浩司がナイフを一振りし、片方の太股に切りつけた。ざくつと開いた傷口から血が流れ出す。「ヒイツ！」

恐怖が弾けた。そして、一抹の希望。跳ねるように起き上がり、美咲が小屋から走り出ていく。

外は熱帯夜だった。

昼間とは打って変わって、蒸し暑さにうだる夜気が肌にねっとり粘り着いてくる。

月明かりに照らされた岩場だらけの海岸を、小屋から少しでも離れようと疾走する美咲の脳裏からは、既に自分が全裸である事も、素足に食い込んでくる尖った岩の痛さも消え去っている。

彼女は、ただ二人の狂人から自分を救ってくれる人を求めて走り続ける。

だが、そんな人はおるか、辺りには人家の気配さえない。海岸から離れるにつれ、周りの景色は自然のままに打ち捨てられている雑木林に変わっていくばかりだ。

美咲は、ようやくここがZ諸島の海に点在する無人島の1つ、しかも、三十分もあれば一周してしまえるほど小さな島である事に気づく。

考えてみれば当然だった。

もしここが無人島でなかったら、男たちが彼女を放すはずがない。逃げられないと確信しているからこそ、脅える美咲を追い詰めて楽しもうと、こんな事を思い付いたのだ。

どこかに落ち込んでいくような絶望感に体が萎える。頭の中に、浩司の言葉が蘇ってきた。

『このナイフ使って、さつきと逆の事言わせてやるぜ、早く殺して下さい、楽にして下さいって、叫ばせてやるぜ』

嫌っ！

でも、でも、どうしたらいいの、いったい、どうしたらいいの。

「おつ、居た居た、キャハハッ！ あんなどこに突っ立ってやがら」

俊一の調子外れの声。言っていた通り麻薬を使ったのだろう、海岸の岩場から現れた男たちは、酔ったように足元をふらつかせている。

美咲が雑木林に逃げ込む。

裸の体に木々の枝が擦れ、刻まれた擦り傷に汗が痛い。湿気を吸った黒土が、必死に走ろうとする素足をめり込ませ、脚が取られる。息が切れる。

「待ってくれよ、可愛い小猫ちゃん！ へへへッ、さつきの女みたいに殴り殺してあげるよ」

「アッハハッ！ 最高の気分だ、ハンティングだ、人間狩りだ！ 女狩りだぜっ！ 捕まえて、ヤリまくりながら腹引き裂いてやる、中身引きずり出してやる！」

狂気の哄笑を振り撒きながら、男たちが迫る。きちんと靴を履き、体力に勝り、しかも麻薬の効果で疲労さえも感じないのだろう、彼らの足どりは早い。

美咲の脚が止まった。そこは土が崩れて出来た小さな崖だった。三メートル程の段差の下は、月明かりも届かず闇に包まれている。

ヒュン！

風を切る音と共に、何かが腰のすぐ横を通過した。ズンと細い雑木を揺らして幹に銚が突き刺さる。水中銃だ、男たちが後ろから水中銃で狙っているのだ。

「あれえ、外れちゃったよ。今度こそ、プリプリしたお尻を串刺しに——」

躊躇いを棄て、崖から身を躍らせる。

ベシヤ！ 濡れた音がした。崖の下は土と言うよりも泥だった。ぬかるみに足が滑り、転倒する。やっと血が止まっていた太股の傷が開き、激痛が走った。

崖の上に足音が近づく。飛び降りてきた男たちが素早く辺りを見まわした。

「チッ！ 見な、お前が外すから逃げられちゃったじゃねえか！」

「何だよ、浩司が脚を狙えって言ったからだろう！」

「馬鹿野郎！ 当たり所が悪くって殺しちまったら、後で楽しめないだろうが！」

溜っていた泥の中に倒れ込んだ美咲から、ほんの一メートル程先で、男たちが怒鳴り合う。

いくらここが崖の根元のえぐれた部分で、月明かりからも影になっているとは言え、後ろを一

瞥されたら確実に見つかってしまうだろう。そして、そうなったら、もう逃げ場はない。

お願い、お願い、お願いだから振り向かないで、お願いだから！

「分かったよ、次は命中止させるって」

「当然だ、ほら、行くぞ！」

浩司が走り出し、その後を俊一が追う。

男たちが行ってしまっただけから、美咲はしばらく悪臭を放つ泥濘から体を起す事もできず、ガクガクと震えていた。

助かった。でも駄目、このままじゃ駄目、小さな島なんだから、このままだったらいつか捕まっちゃう。

そうだわ、ここは島なんだ。だったら船があるはずよ、私と玲子さんを乗せて来た船があるはずよ。それに……。

懸命に昼間のダイビングの時の事を思い出そうとする。

そうよ、モーターボートだった。あの男たちはモーターボートに乗ってたはず。だったら操縦できる、私にも扱えるわ。

芽生えた望みを糧に、勇気を振り絞って立ち上がる。崖をよじ登り、再び海岸の小屋に向かって走り始めた。

あった！

そのボートは、小屋から少し離れた岩場に船尾を向けて係留されていた。

鈍い月明かりに照らされて、さざ波にゆつくりと揺れているトレージャーボートを見た時、今夜初めて心に暖かいものが広がった。

男たちが追ってくる気配はまだない、多分、雑木林の中を捜し回っているのだろう。

ボートの操縦席を覗き見る。意外な事にイグニッションキーは差しっぱなしになっていた。

最悪の場合、エンジンを駆けられなくとも、海に逃げる事が出来ればいいと考えていたのだが、これなら確実だ、人の住んでいる島に行つて助けてもらえる、玲子さんを殺したアイツらを捕まえてもらえる。

ボートに乗り込み、係留している鎖を解こうと船尾に向かう。

だが、そこに見た物は、ダイヤル式の南京錠だった。

「そんな！」

思わず声が出てしまった。キーを差したままだった理由は、これだったのだ。鍵を外せない限りボートは出せない。

屈み込んで挿んだ鎖を、必死に揺すってみても、真鍮製の鍵でガツチリと繋がれた金属の輪は、小さな音を鳴らすだけだ。

美咲は、震える指で鍵のダイヤルを必死に回し始める。

きつと開く、絶対開くわ、たった四桁じゃない、合わせてたらいつか絶対に開くはずよ！

「0729だよ、鍵の番号知りてえんだろう」

嘲笑を伴って、頭の上から聞こえてきた声に、体が凍りつく。

嘘……嘘！　こんなの嘘っ！　どうしてよ、どうしてバレたのよ！

「ほら、俊一、やっぱりここだっただろう。賭けは俺の勝ちだな、この女にトドメ刺すの、俺だぜ」

「仕方ないなあ、てっきり小屋で震えてると思ったのに。しかし、泥だらけで酷い恰好だな、こんな有り様じゃ、血でも落ちてなかったら見付けるのにもっと時間食ったかもな」

血……？　血って？

ハッと気付いて太股を見る。そこでは、崖から飛び降りた時に開いた傷口が、血と混じって赤黒くなった泥にまみれていた。

「アツハハ！　残念だったな、最初は上手く騙されたが、詰めが甘いんだよ！」

乗り込んできた浩司に、蹴り上げられた。

勢い余って転がり落ちた海岸の波が、美咲の体を洗う。

駄目、もう駄目……。おしまいだわ……。

もう涙も出なかった。胃に何かズンと重い物が押し掛かり、萎えた脚は動こうともしない。

「ヒヤハハッ！　ざまあねえぜ、さあて始めるか。手足の臃ぶった切っけがないようにしてから、生体解剖だ、その腹の中にどんなモンが詰まってるのか見てやるぜ！」

死のう、もう死のう。酷い事されて乗り殺されるなら、自分で死んだ方がマシ。

美咲が波打ち際を這いずり、海の深みに向かう。

「おっと、逃がすかよ！」

後ろから髪を掴まれた。そのままボートに引きずり上げられ、仰向けに転がされる。

常軌を逸し、嗜虐に狂った浩司の目が、その手に握られたナイフ以上に狂暴な光を放つ。

「まずはアキレス腱からだ。ほらっ、俊一、何やってんだ、さっさと手伝わねえか！」

振り返った浩司の顔が引き攣った。

「お前、何やってんだよ……」

啞然とした呟きが半開きの口から漏れ、美咲を押さえ付けている腕の力が緩んだ。

渾身の力を込めて、浩司を押しつける。体を起す。目を向けた岩場には、俊一がうつ伏せに倒れていた。背中には深く鉤が突き刺さっており、苦しみもがく体の下の黒い岩は血で赤く染まっている。

「デメエ、生きてやがったのか！」

玲子だった。

俊一の傍らに立つ彼女は美咲と同じく全裸で、その体のあちこちには濃い紫に変色した痣が浮いていた。

「そうかい、やっぱり俊一の野郎にお前をみたいいな女を任したのが間違いだったって訳かい」

浩司が立ち上がり、ナイフを構える。

「だが、勝てるのか？ 俺に勝てるんでも思ってるのかよ？」

浩司が玲子に目を釘づけにしたままボートを降り、ジリジリと近づいていく。

玲子が、俊一の背中に刺さった銛を引き抜こうとした瞬間、突然ダッシュし、ナイフを突きだす。

玲子が間一髪のタイミングでかわし、飛び退く。だが、その時には既に浩司の逆の手は銛に掛っていた。

「武器が取れなくて残念だったな。だけど、なあ教えてくれよ、こんな銛一本だけで、本当に俺に勝てると思ってたのか？ 俺は俊一とは違うんだぜ」

俊一の背中から銛を抜く。広がった傷口から血が吹き出し、かすれた悲鳴が上がる。

「俺は、こんなマヌケとは違うんだぜ！」

引き抜いた銛を突き下ろし、俊一の首を後ろから貫く。驚愕に身を強ばらせた玲子に再び走り寄る。

振り上げたナイフが月光を受けて一閃し、血飛沫が散った。

「玲子さん！」

ボートの船尾から叫んだ美咲の見つめる中、玲子の乳房を繋ぐように、胸にぱっくりと傷口が開いた。

「ほう、よくかわせたな、日頃の訓練のおかげってやつかい。でも、いつまでもつかない」

浩司が玲子に襲いかかる。口元に浮かんでいる表情は、武器を持つ自分の有利さを確信している者のそれだ。

「ほらほらどうした。ハッハハッ！ かかってきなよ。あの女のハラワタ抜く前の小手調べに、切り刻んでやるからよ！」

浩司の執拗な攻撃を、玲子は辛うじて避け続ける。だが、このままではいずれ致命傷を負う事は、彼女の強ばった顔からも明白だった。

「ケッ！ 邪魔臭せえ奴だぜ！」

浩司が大きく踏み込んでナイフを突き出した。一瞬、体のバランスが崩れた。玲子が体をクルリと回してかわし、一連の動きの中で鳩尾に蹴りを叩き込む。

絞り出すような呻きを漏らしてよろめいた浩司が、ボートのすぐ後ろの海面に向かって倒れ込んでいく。

水音が上がり、続いて、美咲の目の前の船尾に海から腕が伸びてきた。船べりを掴んだその手は、

まだしっかりとナイフを握っていた。

美咲が操縦席に飛び付く。

差しっぱなしになっているイグニッションキーを回した。

エンジンの始動し、そして――

二度と聞きたくない音。回転するスクリーンが肉を切り裂き、骨を砕く音と、到底、人間のものとは思えない叫び声。

美咲自身も甲高い悲鳴を振り絞りながら、操縦席にうずくまり両手で強く耳を塞ぎ続ける。

「終わったわ、もう大丈夫よ、もう全部終わったわ」

近寄ってきた玲子がエンジンを切った。

突然戻ってきた嘘のような静寂の中で、彼女を見上げる。

「玲子さん、良かった、本当に良かった。殺されちゃったと思ってた」

「正直危なかったわ、きつともう一人の男の方なら騙せなかったでしょうね。だけどそんな事よりも、貴女には謝っても謝りきれない事しちゃったわね」

「謝るって、そんな……。玲子さんは何も……」

玲子が決まり悪げに視線を逸らす。

「いいえ……そんな事ないわ。でもまさか、この時期にZ諸島の密輸ルートが使われるなんて正直思わなかったし、まさかそれを強奪しようとする連中がやってくるなんて……」

「玲子さん、貴女っていったい……？」

「実は私、麻薬取締官なの……。正確には、厚生労働省沖縄麻薬取締支所の監視員なのよ、だから最初あの漁船が変だと感じた時、無理矢理にでも貴女を島に戻すべきだったのよ」

「麻薬取締官……。じゃあ……」

「ええ。あの連中も貴女もそうだと思ってたんでしょね。酷いめに遇わせちゃって、本当にごめんさいね」

何と答えたらいいのか分からなかった。だけど、もし玲子さんが居なかったら、今頃自分はあの男たちに……。

「ううん、やっぱり謝る事なんてないわ。それに終わったのよ、もう全部終わった事だもの」

海の沖合いに目を向けると、朝日の前兆が白々と水平線を染め始めていた。吹き寄せてきた爽やかな海風が、熱帯夜の重く淀んだ空気をなぎ払い、美咲の髪をなびかせていった。